



2021年1月 最高気温も氷点下となった山口市
国宝瑠璃光寺五重塔に銀花ひろがる冬景色



第 40 号
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理学
部文学科 同窓会

(事務所)
〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202
電話・FAX 083-928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
<http://kouibun.la.coocan.jp/>
メール: kobun1981@ybb.ne.jp

はじめての学部長判断ー
コロナ禍での授業開始を振り返って



人文学部長・
人文科学研究科長

脇條 靖弘

「大変急で申し訳ありませんが、緊急の学部
長判断として、

今週の専門科目の授業(初習外国語、文学は
除く)についてはオンライン授業以外は開講
を来週以降に遅らせる

ことにしました。」これは二〇二〇年四月三日
日(月)の早朝(七時半)に私が人文学部の教員
宛に配信した内容の一部です。振り返るとこの
日が山口大学、そして人文学部に新型コロナが
もたらした混乱の頂点でした。私が人文学部長
の職についた二週間後のことです。

すでに三月の卒業式も四月の入学式も中止に
なっていました。山口大学としては新年度の
授業はなんとか始めたいということで、教室に
集まる人数を減らして座席の間隔を空けるなど
の感染対策をとった上で、まさにこの日から対
面の授業を始めることになっていました。それ
を当日の朝、急遽「学部長判断」で破棄したの
です。

正直なところ、この判断が正しかったという
確信はありませんが、検証の材料にする意味も
込めてこの判断に至った経緯を書き留めておき
たいと思います。

それはダムの決壊でした。三月以来学長は、
感染拡大を防ぐために学生を山口に留まらせ
ると言うStay in Yamaguchiの方針を打ち出し、

人文学部としてもその方針に従うことをすでに
ガイダンスで学生に告げていました。ただ、そ
の間も学生には不安が広がっており、大学の対
応を疑問視する声がSNSに溢れるようになり
ました。私自身はSNSに疎いのですが、そう
いう声を聞いた何人かの教員から、対面授業を
強行することの危険性を懸念する意見が届くよ
うになっていました。ダムの水位はみるみる上
がっていききました。

さらに、一部の学部がオンライン授業の準備
のために授業開始を遅らせる決定を発表するな
ど、大学全体の足並みが乱れました。また、学
長のビデオメッセージの中に、「三日の授業開
始の方針がまるで学部の自主的な判断であるか
のような発言があったことよって、学生に動
揺が拡がりました。「あの学部は安全なオンラ
イン授業をやるのに、なぜうちの学部は危険を
冒すのだ」という怒りの声も混じってきました。
すでに水位は危険な高さに達していました。

そして、授業開始前日の四月一二日の日曜日
の二一時前に、「授業実施の方針について」と
いう通知が学長から学生向けに送られました。
そこでは、翌日から授業を開始する方針は変え
ないことが述べられていました。私を狼狽させ
たのはその通知の中にあつた次の一文でした。

なお、当面五月一日までは、授業を欠席した
場合でも、みなさんの不利益にならないよう
対処します。

一般論としてはこれは学生の不安に配慮した
適切な対応でしょう。人文学部でもこれにつ
いて考慮の余地があることはすでに議論していま
した。しかし、具体的にどのようにして欠席者
に「不利益にならないように対処する」のかに
ついての計画は何もなかったのです。また、学
生向けにこれを伝えたことで、「やはり大学の
授業には感染のリスクがあるのだ」と考える学
生が増えると思われました。もはや不安を抱
える多くの学生を無視して対面授業を始めるの
は無理だと私は判断しました。

数日前には、緊急事態宣言が出ていた福岡などの都市部に就活で出かけていて、直前に帰ってきた人文学部生がいることもわかり、心理的な不安だけではなく、実際に大学内で感染が起ころ懸念も生じました。決壊だけでなく土石流の危険も察知されました。

四月一二日の夜、私は学部の役職教員にメールで自分の判断を伝え、緊急メールの文面に意見をもらって確定させました。ただ配信は、頭を冷やして翌朝に行うことにしたのです。

当然四月一三日は朝から大混乱になりましたが、同じ日の一五時から緊急の部局長会議が開催されることになり、県の方針などを受けて、ついに全学の方針が転換されました。ダムの決壊は大学本部にまで及びました。「本日一五時から臨時の部局長会議があり、新型コロナウイルス感染症に対応する授業のやり方について大きな方針転換がありましたのでお伝えしておきます。」

吉田キャンパスについては、四月一四日から五月一日の期間は対面授業は実施せず、遠隔授業のみとする

ことになりました。「これは一九時前に私が送った人文学部教員宛のメールの一部です。朝の段階では一部を除いて人文学部の授業を遠隔授業にするということだったが、夕方には、共通教育も含めて翌日以降吉田キャンパスのすべての授業を遠隔授業にすることになったのです。決壊の方向は同じとはいえ、「文字通りの朝令暮改が起ころ」と皆があきれたのも無理はありません。

そういうわけで、私のはじめての学部長判断の実質的な有効期間はわずか一日だったので、もし私がああ判断をしていなかったらどうなっただか。その場合でも、夕方にはやはり大学が方針転換をしたでしょうから、どっちみちたいした違いはなかったかもしれません。決壊の奔流になすすもなく、「これが新米の小さな学部長が受ける洗礼なの？ ちよっと厳しすぎやしませんか？」と泣き言を言いたくなる気持ちも

ありましたが、学部の方向を決める判断を任されている責任をスタート早々に思い知ったという点ではいい経験でした。

(哲学コース 教授)



授業が遠隔となり
学生のいない新学期のキャンパス

人文学部教育職員紹介 (令和二年10月現在)

学部長(併)
教授 脇 條 靖 弘

○人文学科

哲学コース

- 教授 高 木 智 見
- 教授 脇 條 靖 弘
- 教授 Alan Djumali
- 教授 柏 木 寧 子
- 教授 藤 川 哲
- 教授 栗 原 剛
- 教授 村 上 龍
- 准教授 横 田 蔵 人
- 准教授 准教授
- 准教授 准教授
- 歴史学コース
- 教授 馬 中 晋 彪
- 教授 田 中 幸 史
- 教授 竹 中 隆 行
- 教授 真 木 正 二郎
- 准教授 滝 野 正 二郎

日本・中国言語文学コース

- 教授 富 平 美 波
- 教授 根 ヶ 山 徹
- 教授 和 野 弘 学
- 教授 森 野 昭 雄
- 教授 野 坂 千 佳
- 教授 尾 崎 慎 一
- 准教授 更 科 真 弓
- 准教授 安 本

欧米言語文学コース

- 教授 岩 部 浩 三
- 教授 太 田 聡
- 教授 Hintereder Emde Franz
- 教授 池 園 宏
- 教授 武 本 雅 嗣
- 教授 上 田 由 紀 子
- 教授 Michel de Boissieu
- 教授 外 山 健 二
- 准教授 下 寄 秀 行
- 准教授 乾 利

図書館司書養成課程

- 講師 伊 東 達 也

資料提供 人文学部

第一回 鴻文会総会のご案内

四年に一度の鴻文会総会も令和三年に第一回目を迎え、左記のとおり、開催を予定しています。

期 日 令和三年八月二十八日(土) 午後
於 山 口 大 学 大 学 会 館

新型コロナウイルス感染症の流行状況により開催方法を変更する可能性も考えながら、会員の皆さまにお会いできるよう準備を進めているところです。
詳しくは別途ご案内します。

《住所変更連絡のお願い》

毎回かなりの郵便物が返却されてきます。
住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会事務局
Fax: 083-928-4527
E-mail:kobun1981@ybb.ne.jp



退任教員ご挨拶

退任をむかえて



高木 智見

編集の都合上、十一月三〇日までに拙文を提出せよ、とのこと。残りわずか四ヶ月足らずとは言え、なかなかその気になれません。とは言え、長年お世話になった人文学部に、一言の挨拶もなく去りゆくのは無礼千万。強いて反省の弁を記し、ご挨拶に替えさせていただきますことにしました。

私が着任したのは一九八九年、平成元年四月です。もはや三二年が過ぎ去りましたが、実感としては、あつという間です。最初の拡大教授会の冒頭で挨拶をした場面が、一昨日のこのように(さすがに昨日とは言えませんが)よみがえります。挨拶の言葉は、「研究者としても、また一個人人間としても甚だ未熟ではあります、精一杯努力・精進するつもりですので、宜しくご指導ください」であったと、鮮明に憶えています。

しかし、この人生で最も充実しているべき三二年の間、私なりに努力・精進は続けてきましたが、研究者としても人間としても、未熟のままに終わり、まことに不甲斐ない限りです。やむなく、最近、たまたま出会った次の史料に基づき、反省をさせていただきます。

公明宣は、曾子のもとで学んでいたが、三年を経て書物を読もうとしなかった。そこで、曾子がたずねた。宣よ、私の門下にいなながら、三年を経て、書物を学ぼうとしない。何か理由があるのか。公明宣は答えた。敢えて学ばないのでは全くありません。私は、先生のご両親が近くにいらっしゃる時は、先生の叱りつける声が犬や馬にすら向けられるの聞いたことがありません。私は立派なことだと感服しています。敢えて学ばないのは、先生が来客に応待されるのを見ていますと、恭しく控え目でありながら、決しておろそかにされているわけはありません。立派なことだと感服していますが、学ぼうとしても実行できません。また、先生が来客に応待されるのを見ていますと、恭しく控え目でありながら、決しておろそかにされているわけはありません。立派なことだと感服していますが、学ぼうとしても実行できません。また、先生が来客に...

由があるのか。公明宣は答えた。敢えて学ばないのでは全くありません。私は、先生のご両親が近くにいらっしゃる時は、先生の叱りつける声が犬や馬にすら向けられるの聞いたことがありません。私は立派なことだと感服しています。敢えて学ばないのは、先生が来客に...

この史料からは、以下の諸点を読みとることが出来ます。第一に、公明宣にとつての学問とは、父母、賓客、下位者などとの接し方、すなわち、人として如何に振る舞い、如何にあるべきかを学び身につけることであつた、と言えます。孔子が、「行いて余力有れば、則ち以て文を学べ」(学而)と述べたように、儒家にとつては、まず人間としてより完成された言動に、余裕があれば書物の学を行うべし、という順序であつた、ということですね。

第二に、曾子は、自らが師たり得ていないことを恥じ、弟子の公明宣に対して詫言、率直に学びたいと告げています。しかし、実際のところは、曾子の日頃の言動が、公明宣を感化して師の言動に学び、その根本を自分のものにしたと思わせたのであり、こうした公明宣のあり方自身が、曾子による指導の賜であるとも考えられます。向上への強い動機を与えたという意味で、最高の教育を行ったと言えます。

第三に、師弟ともに現状に甘んぜず、互いに相手に学び、成長したいと考え、それを実践しています。ここには、師弟関係の一つの理想の

ありかたが提示されていると思います。私が着任した当時には、明確な言葉にできませんでしたが、おそらく、教員として、この曾子と公明宣のような関係を、学生と作り上げることを優先し、そのうえで余裕があれば書物の学を行いたいと考えていたのだと思います。しかし現実には、本末を顛倒して、書物の学を優先してしまつたわけですが、それすら極めて不十分な結果に終わりました。原因は、当然、まさにその人格の修養を怠つたことにあるに違いありません。

儒家がいくつもの表現によつて強調する、己を成す、人と成る、己に克つ、己を尽くす、といった自己修養を積んで、何事にも憂えず、感わず、懼れない仁・知・勇を体得した境地にいたることが全くできておりません。その境地にいたることなく、孔子や、孟子、司馬遷の所説を議論分析しても、結論は限られたものでしかないと思われまふ。

ただし、性善説は本当に有難いものです。かの孔子ですら、「徳を修められないこと、学問が進まないこと、正しいことを聞いても従えないこと、欠点を改められないこと、これらが私の悩みである」(述而)と告白し、「広く学び熱心に志し、必死に問い尋ね自分の問題として考える。仁は、そうした過程の中にある」(子張)と教えてくれています。必要なことは、不完全な自己を、内発的な努力によつて改め、少しでも完全に近づけたいと強く思い、それを実践することですが、私はこの部分に関する自覚をいまだ喪失しておらず、限界を自分で決めて可能性を閉ざすことなく、努力を継続していきたくと考えています。

極めて幸運なことに、私は日本と中国において、まことに勿体ないような二人の傑出した学者を、生涯の師とすることができました。日本の先生には、ほぼ四〇年、中国の先生には三〇年にわたり、研究について、人生について、あれこれ懇切に指導していただきました。今なお、複雑で困難な問題に出会つた時、両先生であれば、この問題をどう解決したのだろうか、と考えて、糸口を見出すことが少なくありません。

ん。しかも両先生は、ともに死の床まで原稿を持ち込み、最後の瞬間まで学問を継続する生き方をその身を以て示されました。まさに「道を目指して進み、途中で力が足りぬ時は休めばよい。老いを忘れ、余命が充分でないことにも気がつかず、ひたすら毎日努め励んで怠らず、死の瞬間まで止めない」(『礼記』表記)という孔子の言葉そのままでした。今後もこれまで通り、両先生を手本として一歩でも一寸でも前に進みたいと思っています。

この間、皆様に本当に多くのお助けをいただきました。また、大変迷惑をおかけ致しました。ご好誼と寛容に、深謝申し上げます。(哲学コース 教授)

山口大学人文学部を

退職するにあたって



田中 晋作

「唐突ですが、今朝大学へ向かう道すがら、刈り取りの終わった田んぼの畦に群生する彼岸花が目に入りました。ところが、この花の名前がどうしても浮かばず、しばらくの間もどかしさとともに戸惑いを覚えました」。これは、着任時に「鴻文」に掲載いただいた挨拶文の書出し部分です。このわけのわからない書出しに、まさに戸惑いを覚えながらも採用いただいた当時のよろこびがよみがえってきます。

また、着任後に受診した人間ドックで、それまで引きずってきた要観察事項がすべて解消さ

れていたことは驚きでした。「返事と挨拶、笑いと迎合」「出たとこ勝負のつじつま合わせ」をモットーに、ストレスを感じない人間などとうそぶいてきましたが、新たな職場のすばらしさと気力の充実が自然と反応したようです。さて、九年間の在職期間は、ありきたりな表現ですが、本当にあつという間のことでした。まず、研究環境が大きく変わりました。古墳時代を対象に古代国家形成過程について、軍事や外交を軸にした研究を続けてきましたが、より主体的な活動ができるようになりました。休会中の「古代武器研究会」を再開させ、年一冊ですが、その成果を『古代武器研究』として刊行できるようになりました。また、韓国の研究者との恒常的な研究交流も可能になり、それまでの浅薄な内容の論議に少しは厚みをもたせることができるようになったと思います。

一方で、いろんなことに手を出しすぎたこともあり、着任後、前著以降の主要論文の取りまとめを進めていきましたが、現在棚晒し状態になっています。また、山口県域や瀬戸内海沿岸地域と近畿地方との比較研究も本格化させたいと考えていましたが、こちらもわずかに数本の論議しか発表できていません。これらは、四月以降に迎えることができるであろう、毎日日曜日(?)の楽しみにしたいと思っています。

学生教育では、素晴らしい資質をもった、なによりも「心根のやさしい」学生たちに出会えたことは何ものにもかえがたいことでした。ただ、考古学の世界に進んでくれた卒業生も出ましたが、十分に誘うことができなかったことに後悔が残ります。たとえば、入学後、外国語に接する機会が少ないように思い、研究室で英書を読む場を設けましたが、「半期出席で焼き肉食べ放題」を付けても、わずか三年で頓挫してしまつたことは苦い思い出です。その中で、同僚の村田裕一さんと卒業生や県下の研究者に呼びかけ「考古学研究会」をはじめたこと、図書館のご協力を得て全国から送られて来る貴重な報告書を、学生たちと閲覧できる状態に整備できたことは、数少ない成果といえるかもしれません。

大学業務では、「山口学研究センター」の研究プロジェクトへの参加は、地域や行政との協働、さらに学内外の新たな研究者と出会ういい機会になりました。着任時の挨拶文に「地域とかかわりを持ち、地域から学び教えられた成果を還元できるよう努めたい」などとわかつたようなことを書きましたが、苦勞もありましたが、少しは貢献できたかもしれません。とくに、学生たちが発掘調査を体験することができるようになったことは幸いでした。

最後になりましたが、みなさまからいただきましたご厚情にあらためて深く感謝申し上げます。よき同僚に恵まれ、とくに、「ピクセル」と「ピクルス」を混同するようなアナログ以前の機械音痴を、忍耐強く指導くださいました事務方のみなさまにはお礼の言葉もありません。最終年に新型コロナウイルス感染症に出くわしたことは想定外でしたが、歴史的事象として記憶される場に立ち会うことになったのも何かの縁を感じます。山口大学の九年間、私にはできすぎの人生でした。ありがとうございました。(歴史学コース 教授)

山口大学は私の国際化研究拠点だ



馬 彪

一九年前に山口大学へ赴任したとき、「あなたは日本の国立大学で中国古代史を教える初の中国人なので頑張ってください」と言われた。一方、当時答えられなかった「なぜ北京の一流のS大学から山口大学へ来たのか」という質問もあった。約二〇年を経てきた今だからこそ「山口大学は

私の国際化研究拠点だ」という答えが出た。

中国古代史を専門とする私は、二五年前に中国側からの大学派遣で日本にきた時、自分の研究が自然に国際的なものになったとは思わなかった。最初は東京大学(三年間)、そして京都大学(三年間)で外国人訪問研究者であったので、すでに自分の研究拠点は日本に移っていた。とは言え、もう「訪問研究者」ではなく「訪問研究者」を招聘する立場が変わったと自覚したのは、やはり山口大学にきてからのことである。

一九年間の山大人としての活動を顧みれば、私の国際化研究は概ね東アジア地域の研究調査、西アジアや欧米諸国の研究交流、山口大学青木流「名物学」の継承、東アジア諸国からの留学生の育成などであろうか。

中国古代史を専門分野としているという理由もあるが、山大人としてのほぼ二〇年、毎年必ず二、三回、中国の古跡や博物館を調査してきた。中国だけでも何十回になろうか。チベットを除くとこれまで中国で調査していない省・自治区はない。古代中国の領土範囲は今のベトナムや朝鮮半島も含むので、研究調査は中国のみならず東アジア地域全体となった。研究活動は山口大学の研究費の他、調査活動の資金は基本的に、山口大学研究推進機構と人文学部の支援を受けて採択された科学研究補助金で行った。自分が研究代表者を務めたもの三件、山口大学や他大学の研究課題の分担者となったもの八件である。自分が研究代表者を務めた二件は密接な研究内容でいわば姉妹関係の研究であったので、その成果をまとめ、取得した研究成果公開促進費により、『秦帝国の領土経営・雲夢龍崗秦簡と始皇帝の禁苑』として京都大学学術出版会から出版した。直近の三件目の成果は今ままとめている最中である。

私は中国を研究しているが、グローバル化の時代になり、西アジア(トルコ)や欧米諸国(フランス・イギリス・アメリカ・イタリア)との研究交流を積極的に行ってきた。その中で、フランス国家科学研究センター・パリ第七大学の中国史大家のKarime Chemta教授に招聘

され、同氏が主宰した欧州連合の第七フレームワークプログラム(EU7/2007-2013)「古代世界数学(SAW)」(研究評議会基金契約269804)に参加して以降、今日までも続いている本格的な共同研究がある。数多くの講演や学会発表以外に、共同研究で出来た論文は文科系のトップジャーナルのArchive for History of Exact Sciencesや中国史のトップ雑誌『中国史研究』などでの公表だけでなく、世界的に有名なSpringer Nature出版社から共著を出版した。この共同研究に関連してケンブリッジ大学、カリフォルニア大学(バークレー校)、ドイツのマックスプランク科学史研究所の学者と交流することもできた。

冒頭に記した「日本の国立大学で中国古代史を教える初の中国人」としての私が、個人的に最も国際的とする研究は、実は二〇世紀一九五〇年代に山口大学文学部部長を務められた青木正児先生が創出した近代流の「名物学」を継承したことである。「名物学」とは中国でも非常に古い訓詁学の一つだったが、青木正児先生は中国における物事を名と実とのつながりを追求され近代的な研究分野を作り出された。これは日本の方として、近隣の中国に対する理解をぐっと深める有効な学問分野となった。折角山口大学人文学部に所属しているので、青木流の「名物学」を継承しながら自分なりの特徴も創出したくて、これまでずっと意識して「名物学」の研究の継承を試みてきたのである。(詳しい研究内容は「異文化研究」一五号に掲載予定)

東アジア諸国からの留学生の育成も私の山口大学の教員としての責務であるが、一九年間にわたって人文学部のみならず、共通教育や他学部、特に東アジア研究科で中国大陸・韓国・ベトナム・台湾の博士課程生、学部生、研究生を数多く育成した。

このように、一九年間お世話になった山口大学は、まさに私の国際化研究拠点だった。感謝の言葉もない。

(歴史学コース 教授)

着任教員ご挨拶

私の「新しい生活様式」



黒羽 亮太

二〇二〇年四月一日付で山口大学人文学部に着任いたしました黒羽亮太と申します。歴史学コースで日本古代史を担当しております。

山口に来るまでは、学生時代以来ずっと京都伏見の深草という町に住んでいました。大量の蔵書をとにかく何とかせねばとダラダラ引っ越しを始めたのが二月の中旬。一度で運べるはずもなく、ようやく引っ越しが完了したのが三月中旬。関西で日に日に「感染経路不明者」が増えていく中、コロナウイルスから逃れるように山口にやって来ることになりました。三月末に京都での最後の仕事を終えてからは、周南市より東には行っていません。

「新しい生活様式」の中で「新しい生活」を始めることになったわけですが、とにかく右も左も分からない。これは普段からそうなのか？ それともこの状況下での特別なやり方なのか？ 加えて、手探りで始めたオンライン授業。うまくいっているのか、いないのか。それでもこうして、何とかここまで無事にやっていられるのは、温かく迎え入れて下さった先生方、職員の方々、そして学生たちのおかげだと思っております。着任後に挨拶もままならずここまで来てしまったので、この場を借りてお礼を申し上げます。

初めての山口暮らしも、もう半年がたちましたが、「外出自粛」期間もあったので、いまだ

に日々新しい発見をしています。小郡の町を歩いていると、名物に「山頭火鍋」と書かれているではありませんか。「山頭火鍋？ 什么火鍋呀？」（「火鍋」は中国語でナベもののこと）もちろん正しくは「山頭火」の「鍋」であって、「山頭」の「火鍋」ではないのですが、研究のために中国を訪れる機会が少なくない私は、ついつい見誤ってしまいました。

日本史（かつては「国史」）研究というと、視線はどうしても列島内部に行きがちです（もちろん、それ自体は大事なことです）。しかし近年では、日本史もようやく国際化しつつあります。私もそういう波に乗って在外研究の機会を得、中国に滞在することができました。それ以来、日本史を広くユーラシア史の中で捉え、位置づけることが、私の研究課題になっています。

私の前任である故橋本義則先生が長らく取り組まれたのも、そのような視角からの宮都・都城研究であったと思います。先生のお仕事は私よりずっとスケールが大きく、カン・パリク（＝北京）ばかりに留まって、オールド・パリクの土城さえ踏んだことのない私は、ただただ圧倒されるばかりでした。しかし不思議と、同じテーマにも関心が向いていました。それは先生が晩年に課題とされた喪葬や墓制に関する研究です。私の場合は特に平安時代の天皇陵（天皇のお墓）をメインに分析を加えてきたのですが、これからは先生が残されたお仕事にも、しっかりと向き合っていきたいと思っています。

列島の古代史をユーラシアの規模で捉えることは、しかし、決して地域の歴史をないがしろにすることはありません。列島がユーラシア史の重要なピースであったのと同じように、列島の古代史は、列島各地の豊かな地域史なしには描くことができません。むしろ地域史にこそその時代のエッセンスが込められるとさえ言えます。ちょうど山口のコロナが、世界的大流行の一部であるのと同じように――。

疫病が大流行した奈良時代、聖武天皇は仏の大仏の銅が山口県（旧美東町）産であることは著名ですが、山口市内に置かれた東大寺鎮座

野荘も、その銅の輸送と不可分だったと考えられています。こうした「山口の歴史」をくまなく歩いて回ることは、私の新しい研究課題です。（歴史学コース 講師）



鴻文会役員

平成二九年八月〜令和三年八月

名誉会長

脇條 靖弘（人文学部長）

会長

副会長

森重 祐二（昭五五年卒・社会学）
渡邊 早苗（昭五九年卒・西洋史学）

顧問

和田 敏英（昭二八年卒・英米文学）
大塚 博久（昭三二年卒・中国哲学）
大野 光生（昭三二年卒・中国哲学）
田中 晋（昭四一年卒・英米文学）
岡光 一浩（昭四一年卒・ドイツ文学）
添田建治郎（昭四四年卒・国文学）

委員

兼清 仁志（昭五二年卒・中国哲学）
原口 公康（昭六三年卒・日本思想史学）
山本 明史（昭六三年卒・国史学）
山本 達夫（昭六〇年卒・西洋史学）
齊藤 禎（昭六一年卒・東洋史学）
林田 徳夫（昭五七年卒・社会学）
和崎 睦子（平六年卒・社会心理学）
大谷 泰子（平一三年卒・社会情報学）
正分あゆみ（平一六年卒・博物文化論）
青島 啓（平一〇年卒・博物文化論）
鈴木千登世（昭五九年卒・国文学）
橋本 達彦（平五年卒・国文学）
藤井 浩子（平二五年卒・中国語学）
池田 容子（平九年卒・英米語文化論）
江浪 香織（平二七年卒・ヨーロッパ言語文学（独））
浅野 靖（昭五七年卒・フランス語学）
中村稚恵利（平一三年卒・言語情報学）

監事

山田 典子（昭六一年卒・社会学）
片山 恵子（平元年卒・英米文学）

学内委員

根ヶ山 徹（昭六〇年卒・中国語学）
村田 裕一（平三年卒・考古学）

◎令和元年度事業報告

1. 第51回（5/11）役員会
2. 第28回（7/26）山口大学同窓会理事会
3. 第7回山口大学ホームカミングデーおよび
旧制山高創立100周年・山口大学文理学部創立70周年
記念式典及び祝賀会（10/26）
4. 会報「鴻文」編集会議（11/28）
5. 会報「鴻文」第39号発行（12/15）
6. その他

◎令和2年度事業計画（案）

1. 役員会（第52回5月書面開催、第53回10/17）
2. 山口大学同窓会理事会（未定）
3. 会報「鴻文」編集会議（10/17, 12/17）
4. 第8回山口大学ホームカミングデー（10/31 オンライン開催）
5. 会報「鴻文」第40号発行（1/25）
6. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式（3/23）
7. その他

◎令和元年度決算

収入総額	5,228,556円
支出総額	2,042,270円
残高（次年度繰越金）	3,186,286円

◎令和2年度予算（案）

〈収入の部〉

科 目	元年度予算額	決 算 額
繰越金	3,338,881	3,338,881
会費収入	1,800,000	1,660,000
賛助金	200,000	229,654
雑収入	119	21
合 計	5,339,000	5,228,556

〈収入の部〉

科 目	2年度予算額	摘 要
繰越金	3,186,286	
会費収入	1,800,000	10,000円×180人
賛助金	200,000	
雑収入	114	利子等
合 計	5,186,400	

〈支出の部〉

科 目	元年度予算額	決 算 額
会議費	50,000	20,024
役員等行動費	30,000	17,000
事務所運営費	990,000	891,095
事務費・通信費	160,000	202,226
会報費	750,000	719,411
ホームページ維持費	25,000	19,756
分担金	151,000	150,864
寄付金	0	0
助成金	100,000	13,440
慶弔費	50,000	8,454
予備費	3,033,000	0
合 計	5,339,000	2,042,270

〈支出の部〉

科 目	2年度予算額	摘 要
会議費	50,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	30,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	950,000	家賃、人件費、事務所経費（電話・電気、その他）
事務費・通信費	200,000	封筒印刷6,500枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	750,000	印刷7,200部、発送6,200通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	25,000	プロバイダー契約料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会（手数料含む）
寄付金	0	
助成金	100,000	「同窓会等」開催助成（手数料を含む）
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
予備費	2,880,400	
合 計	5,186,400	

〈特別会計〉

科 目	30年度財産	元年度財産
中国電力債	1,465,537	1,465,537
合 計	1,465,537	1,465,537

〈特別会計〉

科 目	2年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
合 計	1,465,537	

令和2年5月2日、監査の結果過誤なく的確に
経理されていることを確認します。

監 事 山田 典子
片山 恵子

追悼

内山俊彦先生

「音容 日に遠し」

大塚 博久



故内山俊彦先生 神奈川県出身 昭和八年生れ 享年八七歳

新型コロナウイルス感染症脅威のため、行動ままならず、味気ない日々を過ごしていた七月末のある日、突然忙しない電話のベル、「先生大変です」と叫ぶ。「君は誰なの?」「もと中哲一八回卒の石川兼彦です」。「一体どうしたんだ」と問い糺す私。「内山俊彦先生が急性膵臓性肺炎で亡くなられたと、阪神在住の者たちから連絡がありました」。私はそんな話聞いていないがと不審がると、四日ばかり苦しまれて七月一六日お亡くなりになり、遺体はすでに医学部に献体されたそうです。「それで...私への用件はなんだ」と質すと、是非この事実を『鴻文』に載せて呉れという。「そう簡単じゃないぞ、とりあえず副会長や編集委員の方に聞いてはみるけれど...」。確か中哲の記事は第三三号に「内山俊彦先生傘寿をお祝いする会」と題して掲載されていて、今度は米寿の集いを催そうなどと書かれている。

湯浅幸孫助教授が京都大に転任後、昭和三六年東京大・大学院博士課程を終えたばかりの白哲気鋭の青年が着任された。業績は「中国天人合一思想体系の総合研究」(科研)の一員として「漢魏道家の天人思想の研究」を分担中で本学の講座の他、京都大でも『荀子の思想』を兼担。私は主任教授石黒俊逸先生より相応の住居を探すよう依頼され、上堅小路の旧家の別棟をお世話した。当時アイドルの「俊ちゃん」全盛の頃であった。某夫人が外郎を差し上げたところ、外郎と蒲鉾は食べませんと断われた。小田原育ちの意地であろう。ところがこの年の一月、石黒教授が急逝されるという悲劇が起こり、在籍学生少数とはいえ(昭和四三年岩手大より天野鎮雄教授着任)約一〇年近く研究室運営の重責が先生ひとりに課せられる事態となった。この間、お茶の水大卒の夫人と結婚され、市内の住居を転々と変らされた挙句平井に新築された。お二人の固い決意の表われであろう。先の学生の言にあるように、先年逝去された夫人の「細かなお心遣いでもおとなし頂いた」想い出に込められている。また学会の重鎮・新進気鋭の諸先生の切れ目ない非常勤講師の招聘の実現に示されている。

内山先生は昭和六二年教授昇任、翌六三年三月京大へ転任、歓送会に集まった卒業生は四〇名であった。京大定年退官(平成一〇年)後、愛知大学現代中国学部教授に転じて三年勤務。山口大学・京都大学名誉教授。文学博士。主著『韓非子』『荀子』『中国古代思想史における自然認識』等がある。

世間に「蓋棺論定」は棺のふたをして初めてその人の評価が定まるという。私の如き浅学非才の者が学識深い内山先生を評定できるものではない。だがある時雑談していて「私は漫画を読むのが好きなんです」といわれた。一体どんな傾向、乃至は作者か聞き損ねたのが唯一心残りである。

(文理第四回卒 中国哲学) 合掌

学生数 (令和二年一〇月現在)

Table with 4 columns: 人文学部, 人文学科, 人文社会学科, 言語文化学科, 合計. Rows for years 1-4 and total.

Table with 2 columns: 大学院人文学部研究科, 人文科学専攻. Rows for years 1-2 and total.

資料提供 人文学部

令和元年度 学部卒業生・大学院修了生の進路

Table with 2 columns: 学部卒業, 大学院修了. Rows for various career paths and a total row.

Table with 2 columns: 学部卒業, 大学院修了. Rows for various career paths and a total row.

平成三一年/令和元年度 社会学研究室同窓会

(東京支部)のご報告

阪本 良太

現在東京では、毎年一月の最終土曜日に、東海地方以東在住で、山大人文学部の社会学研究室・社会学情報論コース・社会学コースから集まった卒業生が集まって「東京支部」として同窓会を開いています。名簿には、上は文理学部当時を知る八〇〇九〇代の諸先輩から、後輩は卒業したばかりの二〇代まで、九〇名ほどのメンバーが名を連ねています。

会場はメンバーの伝手で、四ツ谷駅至近の主婦会館プラザエフ(東京都千代田区六番町一五)の二階レストランを借りて行なっています。

ここ最近懇親会(酒宴と各自の近況報告)の前に、お招きした社会学の先生方に、短時間ではありますが、研究内容などをお話ししていただいています。山大的先生に東京でお会いし、講義内容に質問でき、在学当時の懐かしい雰囲気浸れると、出席者にはなかなか好評です。

さて、今年度は平成から令和へ天皇家の代替わりが行われ、皇室関係行事が目白押しだったことが記憶に新しいと思います。そこで今年度の東京支部の同窓会では、講師に初めて山大人文学部の先生ではなく、宮内庁式部職儀式第一係の港賢一朗氏をお招きしました。同氏は山大経済学部を二〇〇九年に卒業後、山大に就職し、人文学部で学務係員としてしばらく勤務された経歴をお持ちで、横田先生よりご紹介いただきました。

時代の節目となる一連の行事の当事者の方々に話を聞くまたない機会ということで、小谷先生・横田先生・講師の港氏を含め、一月二五日当日には総勢一六人の方にご参集いただきました。港講師は、皇室に直接関わることのないわれわれが普段知ることのできない、様々な皇室

行事(特に即位礼)の裏話などを含め、興味深い内容をご披露くださいました。

詳細については少々ゴシップめいた逸話もあり、全て公開できませんのでいくつか抜粋してご紹介しますと、

一、皇室行事の進行には晴儀と雨儀とがあり、即位礼についてはこれまで記録が残っている中では殆どが晴儀であったが、当日の朝はあいにくの雨で雨儀による進行となり、後世へつながる貴重な記録が取れた

二、式部職職員は数人で数ある皇室行事を分担しており、各人一つは行事を主で担当する(因みに港氏は天皇誕生日を担当されるとのこと)

三、儀式に使われる衣装や調度品などを製造・補修できる企業や職人が年々減っており、次回同様のものを揃えられるか未知数

等々：数々の内容をお話しいただきました。最後に、お忙しい中東京まで足を運んでくださった小谷先生・横田先生、ご多忙の中資料を含め準備された講師の港氏にこの場を借りて感謝申し上げます。

(人文第二〇回卒・社会学情報論コース)

同窓賛歌

山口大学とのつながり

前坂 祥子

山口大学に通って、約二〇年が経ちます。人文社会学部社会学情報論コースを卒業後は、大学職員として山口大学に入職し、いくつかの部署を経た後、二〇一九年四月から、人文学部の学務係長として配属されました。人文学部講義棟は、建物の形は学生時代そのままに、耐震改修工事により内装はきれいに明るく生まれ変わっています。はるか昔の先輩方が日々使われてきたであろうスプリングの壊れたソファ、誰が置いたか分からない漫画や食器類：なんとも昭和レトロな雰囲気漂うゼミ室が無くなっていったのは少し寂しいですが、指導教員であった横田尚俊先生をはじめ、学生時代にお世話になった先生方が現役でおられ、当時とは異なる立場で先生方とお話しすることが、どこか不思議な気持ちでもあります。

学生時代を振り返ると、勉学に打ち込み、充実した四年間だったと胸を張って言いたいところではありますが、実際は真面目で優秀な学生とは言い難く、欠格条件に引つ掛からないための出席回数管理は抜かりなく行い、成績はさておき落第だけは免れる、というような学生でした。現在は、業務上、学生の頃の何百倍も『履修の手引き』や『シラバス』に目を通すようになっていますが、この授業を受けてみたい、あの授業も面白そう、もっとあの頃に勉強すれば良かったと思うことがよくあります。二年ほど前でしょうか。横田先生から、学生時代に提出したレポートの束が返却されました。恐る恐る読み返すと、あまりにも稚拙な内容に赤面する思いで、あの瞬間ほど強く後悔を感じたことはありません。

学務係は、ご存知のとおり、人文学部生の事務担当窓口です。学生生活に関するあらゆる手続きを行っています。大学からの連絡事項を確認していない、必要な手続きを怠っている、

説明資料を全く読んでいない：等々、学生対応をする中で「なぜ!？」と感じることが多々あります。しかし、ふと思うのです。当時の自分はどうかだったかと。確かに、掲示板を毎日見たりしないよなあとか、この説明は分かりにくいかなあとか、学生の立場に寄り添って考えてみると、業務の改善点が見えてきます。また、大学は学生達が社会に出る一歩手前の段階です。社会人としての最低限のルールを教育的立場から指導することも大事で、いつの時代にもあるであろう「学務の人、感じ悪いよね」のヒール役をしなければならぬ時もあります。

入学し、必要単位を修得して卒業する。当たり前のことに感じますが、実はその裏で、必要とする学生像、身に付けさせるべき能力、入試方法、教育方法、カリキュラムの在り方や学生指導、あらゆる面で教員と職員が一丸となり、奮闘しています。「人文学部で学ぶ」この意味を改めて考えさせられる毎日です。

さて、最近ひょんなことから、同級生の近況を知る機会がありました。とある企業のホームページで採用情報を確認していたところ、見覚えのある顔を発見。就職活動をしている大学生へ向けて、業務内容の紹介や応援メッセージを発信していました。当時と変わらない笑顔が非常に懐かしく、また、採用する側へいることに時の流れを感じました。と同時に、活躍している様子を知り、自身も頑張らなくてはと背筋が伸びる思いでもありました。同級生の皆さん、会う機会がなかなかありませんが、お元気でしょうか。山口に来る機会があれば、ご一報を!ぜひキャンパスにもお立ち寄りください。

(人文第二三回卒・社会学情報論コース)



マスクとアクリル板で
コロナ対策

宮崎 萌美

あたたかい思い出も苦い記憶もあった学生生活、ふと金木犀の香りをかぐと蘇る。

山口大学に受験を決めたのは、哲学を学びたいと思ったからだ。卒業論文では心身問題を取り上げたが、蓋を開けてみれば悲惨な論文だったが、当時はこれでも一生懸命やっていたのだろうが、もっと勉強しておけば良かったと思うのはいつも後になってから。結局のところ、「哲学」のそのあとは人生の中でぼちぼちやるべしというのが私に残された宿題である。



卒業後、県外や地元へ帰り仕事をしていった。それから二年後、私は山口の地へ戻ってきた。自身の社会人劇団「劇団シバイヌ」を旗揚げし、今年で九年になる。在学中、演劇サークルに所属し、活動していたころは随分自由だと思っただ。(もちろん「可能な限り自由」という意味で。)高校から比べると勉学も含め自分のための時間であることを自覚したからだと思う。劇団をはじめれば働きながら稽古を行う不便さはあったものの、自由度は増したように感じた。けれど、今年に入ってから、「自粛」の看板を掲げられたエンターテインメント業界、それから大学という自治の場も一旦沈黙せざるを得

ない状況に陥った。二〇二一年三月、震災の年に卒業し、社会へ飛び出した私たちだったが、あの時と違うのは「もう対人の演劇や芸術は以前のように戻らないだろう」という確かな予感だ。小劇場で人の体温や息遣いを感じながら上演できる喜びは、変化を求められている。

こんな苦しい日常でも頑張っているという感涙を誘うような演出にも厭きてきた。この状況をポジティブに捉えたり、うまく消化できない自分にもあきた。一方でイベントや企画を考えたが、しかしもがかないという選択肢もあるのだと言いつつも聞かせながらやり過ぎている。この時代を経て、変化し強くなる分野もあるだろう。なくなるものもある。

現役の学生たちはどう過ごしているか。無力感につぶされないようにと願う。それは自分もだ。

経済学部から人文学部へと通じる曲がり角に、いまもあの金木犀は咲いているだろうか。

(人文第三〇回卒 哲学・思想コース)

山口大学から海外へ



近藤 啓輔

山口大学を卒業し早八年が経ち、私は現在メルボルンで留学エージェントTime Studyという会社で、日本チームのマネージャーとして働いています。大学生の時は、「英語の教員になる」と教員採用試験に向けて勉強をしていた毎日でしたが、大学在学中には想定もしていなかった人生を歩んでいます。

大学時代の思い出を、と言われましたがあまり覚えていないため、なぜ海外で働くことになったのかという経緯を書かせていただければ

と思います。

英語が好きで、大学で英語を専攻し、英語が好きだから英語の教員にという単純な流れで人生設計していた私ですが、一年間山口県の中学校で英語の教員として働き、自分の英語力(Speaking力、Listening力)のなさから、ALTとの授業が嫌で仕方ありませんでした。そのコンプレックスから脱却するため、まずはカナダ・トロントへワーキングホリデーに行きました。

カナダでは、語学学校に通い、レストランで働くというワーホリならではの生活をし、色々なカナダ人と友達になつていく中で、カナダ人と日本人で大きく違う考え方に会いました。

日本で年末でもない、お盆でもない、何でもない時期に有給休暇などを取得しようとする。「この忙しいのに? あなたがいないとその分他のスタッフに迷惑がかかるよ。」教員であれば、「あなたが休みを取っている間に他の誰かが授業代わらないといけないのだよ。迷惑かけてまで休み取らないとダメなの?」このような言葉を取られることも実際にありましたし、休みを取ることに対してこのような考え方は存在していると感じます。

同じ状況で、カナダの場合は、「ホリデー取るの? いいね! どこ行くの?」と必ず言われるというのです。この考え方に出会い、自分の中で、「(日本で)英語を使って仕事をしたいと思って英語の先生を目指したけど、そもそも英語を使えるのであれば日本で働く必要はあるのか?」と自身自身に問うようになりました。英語が使いたい↓英語の先生、と単純に考えていた自分。仕事を考える時当たり前のよう存在していた「括弧(日本で)」の括弧が消えて、「どこで、なんの仕事がしたいのか?」と問うようになり、日本に戻って教員として働くビジョンが薄れていきました。

新天地としてメルボルンを選び、メルボルンで働く上で英語ができるのは当たり前。オーストラリアで働く上で、自分の武器は何なのかと考えた場合、「日本人であること。」しかなく、

さらにワーキングホリデービザという就労制限のある短期間のビザしかなかったため、通常の求人情報での就職も難しいと思い、求人出していない韓国資本の留学エージェントにいきなり連絡を行い、「無給でいいから働かせてほしい」と提案して働き始めました。利益を上げるまでは給料なしを自分から提案し、最初の四か月間は無給で働き、それ以降は徐々に申し込み生徒が増え、今では二人の日本人を雇用し、日本人チーム三人体制になるほどにビジネス拡大に成功しました。コロナの影響でオーストラリアの国境は完全に閉じており、日本人生徒さんは渡航が出来なくなり厳しい状況は続いているますが、何とか売り上げを確保し、生き残っている状態です。

仕事環境も結果が出れば自分の成果、結果が出なければ自分のせい。と自分にプレッシャーをかけて、自由に働けており、常にモチベーションを保って生活出来ています。

大学生の頃、大して成績もよくない普通の学生でしたが、そういった人間でもトライすれば自分が自分らしくいられる場所まで生きていくことができている。コロナが落ち着いた暁には「日本で何して働くのかな」と可能性を日本だけに狭めることなく、海外や様々な選択肢を考えるきっかけになって頂ければ光栄です。

(人文第三二回卒 英語学・英米文学コース)



山口大学発スタートアップ企業を育成・支援

「山口フィナンシャルグループ投資ファンド」[Fun Fun Drive]が総額三億円を支援

対象：学生・教職員・卒業生

山口大学と山口フィナンシャルグループ（YMF G）は、地域における新たな産業基盤の創出と知の集積を図ることを目的として、山口大学発スタートアップ企業を育成・支援する取組みを共同で実施しています。

YMF Gは、山口大学の学生・教職員・卒業生を主な投資対象として設立された投資ファンド「Fun Fun Drive 投資事業有限責任組合」により、山口大学発ベンチャーを始めとする地域のスタートアップ企業へのリスクマネー供給を促進し、山口大学において行う本取組みに関する支援や運営を連携して行います。令和二年五月には第一号案件へ投資を行いました。

山口大学は、「スタートアップイベント」や「起業関係教育プログラム」の実施により、起業家マインドの醸成を支援するとともに「ベンチャー起業支援室」を学内に設置し、学生・教職員・卒業生の起業家を支援します。

ファンド総額…三億円

一社あたり最大三千万円を投資

県外にお住いの卒業生も支援対象です。本事業に興味をお持ちの方、起業をお考えの方はベンチャー起業支援室に、熱い思いをご相談ください。

【ベンチャー起業支援室】

○活動内容

1. YMF Gの専門家及び山口ティール・エール・オーとの協働による起業支援
2. 「志」イノベーション道場をハブとしたイベント開催

○支援対象

1. 学生、教職員及び卒業生
 2. 学びや専門を活かしたイノベーションが期待できるもの
 3. 起業のための知財相談
 4. 起業に関する各種情報の発信
- ① 既存のサービスではなく（今あるものと同じではない）、
- ② 革新的なアイデアや技術をもとにして（アイデア・技術で勝負）、
- ③ 新しいサービスやビジネスを展開するもの（新しい価値を創り出すもの）

○相談方法

学生・教職員は、ベンチャー起業支援室ホームページの起業相談ヒアリングシートに必要事項を入力してください。

卒業生は、ホームページから様式をダウンロードし、必要事項を記載の上、メールで相談内容をお知らせください。ヒアリングシートの記載内容を確認しましたら、折り返しメールまたは電話で相談日時等について連絡します。

○ベンチャー起業支援室 連絡先

TEL：0836-85-9961

E-mail：venture@yamaguchi-u.ac.jp



* シードステージ・アーリーステージにある山口大学発ベンチャーや地域発スタートアップを主な投資対象とし、地域へのリスクマネー供給とハンスオン支援を積極的に行うことを目的として設立されたファンドです。

研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会に対する助成要綱

（目的）

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会（以下「同窓会等」という。）に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

（助成の対象）

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

（助成の内容）

- 第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。
- 第四 同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。
- 第五 同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

（助成の申請）

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書（別紙様式1）に参加者名簿（別紙様式2）を添えて提出するものとする。

（助成の内定）

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長（以下「会長」という。）はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

（報告書の提出）

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書（別紙様式3）を提出するものとする。

（助成の決定等）

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

（会報原稿の提出）

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」（以下「会報」という。）に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

第九 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

- （一）本文の書式は、タテ一行二一文字とし、分量は、全五五行以内とする。
- （二）本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を（ ）内で文末に表記する。
- （三）会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。
- （四）会報原稿の締切りは、九月末日とする。

（その他）

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。



YMFAG×山口大学：山口大学学生等への共同起業支援

イノベーションの創出に向けた人材・知・資金の好循環システムの構築



鴻文会会則

(昭和五六年一月三十一日制定)

(総則)

- 第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七七三―二沖田ビル二〇二におく。
- 第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学文学部の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
 1. 会報及び会員名簿の発行
 2. 会員相互の連絡、親睦の増進
 3. その他必要と認められる事項
- 第四条 (会員)
 1. 正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者
 2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
 3. 特別会員 山口大学文学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官
- 第五条 (会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。
- 第六条 (役員)

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

 1. 会長 一名
 2. 副会長 二名
 3. 委員 若干名
 4. 監事 二名
- 第七条 役員は次の職務を行う。
 1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は副会長を補佐する。
 2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

(総会)

- 第九條 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。
 1. 事業の報告
 2. 会計報告
 3. 役員を選出
 4. 会則の改正及びその他の重要事項
- 第十條 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。
- 附則

この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。

この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し、事務局で保管する。

鴻文会「賛助会員」の制度に ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を行い、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であって、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございます。

活動を支えて下さった方々のお名前を記して、お礼に代えさせていただきます。

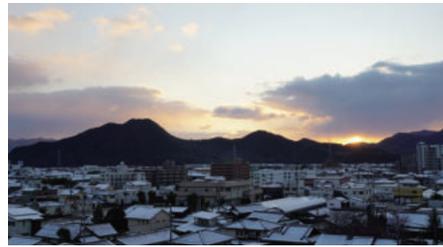
なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしくお願いします。

令和元年度賛助会員 (順不同 敬称略)

- 原口公康 宮崎祐子 木村孝子 木村比沙子
- 森重祐二 松尾正洋 本園明信 添田建治郎
- 安國美紀 伊豫英城 久米廣典 竹下由美子
- 岡ゆみこ 大港章子 村田和夫 細山田康弘
- 大塚博久 渡邊早苗 和崎睦子 椎野由紀子
- 大谷泰子 片山恵子 木下正俊 小池美佐子
- 中野文男 町田政勝 宮原省吾 小篠美智子
- 白石重昭 野村明夫 吉川敏子 中嶋みどり
- 沖中武志 住吉隆義 中尾哲雄 藤田加奈子
- 服部佑美 水畑哲也 奥田和子 福山三千代
- 岩尾功一 中垣八朗 野村悦子 戸谷美代子
- 田中誠二 石川哲也 富田一彦 武居スミヨ
- 兼村優子 山本孝夫 吉次希理 金山勉
- 桐原恵子 大串明子 井上智美 渋谷律
- 大森保典 山岡典子 高橋幸輔 青木寛

- 津田重喜 清水康裕 芳野奈央 磯部薫
- 加藤千聖 小川朝子 石井啓子 橋本学
- 高崎淳子 廣田百合 坂本貴志 菊谷進
- 藤澤真弓 柳浦俊静 平田昌司 村田博
- 岡光一浩 三浦明子 小野美典 田中晋
- 村上明 浅野靖 島越郎 吳 娜



令和三年元旦 日の出

編集後記

山口の四季折々の風景は、例年と変わらず今年も移り行きました。しかし、コロナウイルスというものが、人間社会を一変させています。そんなコロナウイルスの毎日のニュースで辟易していますが、人類はこれまで同じような道を通ってきたわけですから、この試練に負けずに元気を出してやっていきたいものだと思います。皆様のご健勝をお祈りいたします。(森重祐二)

はやぶさ2を「リュウグウ」に行かせ、IP S細胞を操縦しても、ヒトは地球の生物のひとつにすぎないのだよ、と小さなウイルスが私たちに諭した一年でした。自然への謙虚な気持ち忘れず、また、感謝の気持ちをもって日々過ごしていきたいものです。(渡邊早苗)

新型コロナウイルスの影響で様々な年中行事が中止。休日は外へ出かける事なくステイホーム。テレビをつけても季節感あふれる映像は見られず。ふと、「今は、何月？」と思うこともしばしば。季節の移り変わりを感じる事なく一年が過ぎてしまったように思います。(山本明史)

コロナ禍の状況下、編集会議もこれまでとは異なりました。マスクの装着、暖房をつけながらの換気、飲食は無し等々。ふと持ち寄りのお菓子やお茶を頂きながらの会議が懐かしく思い出されましたが、今そんな会議を開催すれば感染リスクを増大させてしまいます。自分を含めて誰が感染していてもおかしくない。免疫力アップに動きます!(和崎睦子)

面白い体験をした。大学の図書館で同じ日に同じ本を借りた人が私の他にいたのである。その二、三日前、何気なく手にした本はフランス文学を解説したものだ。一番初めが『ボヴァリー夫人』だったから、これを読んでみようという図書館に行った。この本は上下二巻で文庫本は新版と旧版がある。新版を借りようとしたが上巻が見つからない。仕方がないから旧版を借りて、受付で聞いてみたら貸し出し中で、返却日は私と同じ日であった。(大谷泰子)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の宮澤さんが勤務しています。付近にお越しの節には、鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。(一同)



原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。投稿要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず()内で表記すること。
 ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。